

The Apple Tree の文体

大 澤 銀 作

The Apple Tree (林檎の樹)はイギリスの小説家であり劇作家である John Galsworthy (1867-1933) によって1916年に書かれ、彼のすべての作品中では小さな小説にすぎないが、アシャーストという文学好きの青年の若き日の恋愛を、回想形式で抒情性豊かに描いた佳作である。この小説の主題は単に恋愛と階級意識のジレンマというだけではなくて、若い世代に共通な問題を秘めているだけにアピールする力が大きい。文章も非常に洗練されている。

ここではあくまで The Apple Tree の文学性を論じるのではなくて、作者がどのような語学的配慮をしているかを研究することが本稿のねらいである。

1. 特示副詞
2. 特示形容詞
3. 準特示副詞
4. As if[As though] + 準動詞
5. 法副詞化した思考動詞
6. 単純形副詞
7. 叙述同格語
8. 半ば状態を述べる自動詞
9. 転移修飾
10. ネクサス関係
11. 絶対用法

(98)

12. 代不定詞
13. There + be 以外の自動詞
14. There be + 定的主語
15. 近接未来
16. イタリックによる強意
17. 助動詞 do による強意
18. 直喩 (Simile) による強意
19. 従位接続詞の等位接続詞化
20. 古風な (Archaic) 英語

1. 特示副詞 (Distinguishing Adverb)

語・句に対して特に相手の注意を引くため、または語・句の選び方や使用範囲について、話者の心的態度を表わすために使用する副詞である。

特示副詞の取る位置は、特示される語・句に近接する。特示される語は、名詞や代名詞のことがある点では他の副詞と大いに異っている。

- 1) Would it not be *almost* a relief if she did not come? (もし彼女が来なければほとんどほっとするといえるのではないか)
- 2) He put his hands on the day, *almost* warm tree trunk, whose rough mossy surface gave forth a peaty scent at his touch. (彼はかわいた、あたたかいといってもいいくらいの木の手をのせた、そのごつごつしたコケのはえた表面は彼がさわると泥炭のようなにおいを出した)
- 3) Joe turned away ; the back of his neck was *literally* crimson. (ジョーは顔をそむけた、首のうしろが文字通り紅だった)
- 4) For a minute he *literally* hated this earthy, cynical world to which one belonged, willy-nilly. (しばらくの間彼はいやでも人が住まわなければならないこの土臭い、皮肉な世界を文字通り憎んだ)
- 5) Ashurst smiled, and when he smiled his face was *rather* beautiful.

(アシャーフトはにっこり笑った、笑うと彼の顔はどっちかと言うと美しかった)

6) He *too* was soon bootless and sockless. (彼もまたまもなく靴と靴下を脱いだ)

7) Did women have it *too*? (女もそうなのだろうか)

8) No mistaking that, *even* in the dark, nearly twice the height and size of any other, and leaving out towards the open meadow and the stream. (他のどの木よりも二倍の高さと幅があって、広々とした牧場と小川の方に枝が伸びているので、この暗闇の中でさえも間違えることはなかった)

2. 特示形容詞

absolute, utter, sheer, pure, mere, complete, simple, precise, regular, total などこの種のもので、特示形容詞という。この種の形容詞は大体「全くの、正真正銘の」などの意味になり、ただ強めるだけである。話者の心的態度を表わすものなので、あってもなくても意味そのものには変りがない。とる位置は必ず主要語の前位である。

1) He said that all the other boys were *regular* gipsies.” (彼は他の男子はみな本物のジプシーだと言った)

2) A *regular* Diana and attendant nymphs! (まさしくダイアナの女神とおつきの妖精たちってところだ)

3) But to write of it seemed *mere* insipidity! (しかしそれを書くことは全く無味乾燥だ)

4) In the *utter* silence a blackbird shouted. (全くの沈黙の中でツグミが鳴いた)

3. 準特示副詞

話者の主観的投入語句で特示副詞的に使用されるものがある。そのほとんどが The Apple Tree においては *sort of*, *kind of* である。その数は20例余。

(100)

- 1) She did not answer; and in a *sort of* pet he added. (彼女は答えなかった。そしていわば不きげんになった様子でつけ加えた)
- 2) The gate where he was leaning grew grey, a *sort of* shimmer passed before him and spread into the bluish darkness. (彼が寄りかかっている門が灰色に変わり、いわば微光が彼の目の前を通り、青っぽい暗闇の中に広がっていった)
- 3) Then a *sort of* spasm seemed to convulse his face. (それからいわばけいれんのようなものが彼の顔をゆがめさせるように思われた)
- 4) He rose from table a *sort of* hero. (彼はいわば英雄気分でテーブルから立ち上った)
- 5) Garton's was a *kind of* dark unfathomed mop. (ガートンの髪はまあ黒くってはっきりしないくしゃくしゃ毛といってもいいようなものだった)
- 6) In and out of the boulders and thorn trees, muttering and cursing, yet with a *kind of* terror, he rushed and stumbled. (ぶつぶつぶやいたりのろったりしながら、しかもいわば恐怖のようなものを感じて、岩の間やさんざしの茂みの中を彼は走ったりつまづいたりした)
- 7) He spent the whole day in a queer mood, cherishing a *kind of* sullenness against himself. (彼はその日一日中、いわば自己嫌悪におそわれて奇妙な気分で過した)
- 8) "Mrs. Narracombe, my aunt," had a quick, dark eye, like a mother wild-duck's, and *something of* the same snaky turn about her neck. (「おばのナラコム夫人」は野がもの母親のように、すばしこい、黒い目をしていて、それに彼女の首のあたりはいくぶんか同じようにへびのようにまがっていた)
- 9) Ashurst had loved his partners at his dancing class; loved his nursery governess; girls in school-holidays; perhaps never been quite out of love,

cherishing always some *more or less* remote admiration. (アシャーストはダンスのクラスでパートナーを愛したり、女の家庭教師を愛したり、休日を共に遊んだ学校友達を愛した。いつも多かれ少なかれ何か遠い憧憬のようなものを持っていて、全く恋心なしにいたということはなかった)

4. As if[As though]+準動詞

As if[As though]以下を完全文 (full-sentence) で言わずに準動詞句の形で表わすことが多い。これは文全体が鈍重になるのをさけるためであり、完全文の簡略化とみるより、もともと準動詞句があって、そこに作者の主観的な気持ちを表わすために、あとから投入したものと考えられる。従って一般に言われているように、あえて as if または as though の後を主語と be 動詞を補って完全な文にする必要はない。なお原則的には as if は可能・不可能を強調し、as though は比較を含意するとも言われているが、The Apple Tree においてはその区別はほとんどなく使用されている。

1) She took the pillow up, holding it *as if reluctant* to shake out the impress of his cheek, dropped it, and turned round. (彼女は枕を持ちあげ、まるで彼のほおの跡を振ってなくしてしまうのが名残り惜しいように抱いていたが、それを急に落して、振り向いた)

2) She forced down her upper lip, *as if afraid* that to smile was not polite. (彼女は、にっこり笑うことは礼儀正しくないと恐れているかのように上口びるを押しやった)

3) The piano tinkled on, the stars winked; and Ashurst gazed out before him at the dark sea, *as if spell-bound*. (ピアノがコロコロと鳴り続け、星がまたたいた。アシャーストは呪文にかかったかのように前方の黒い海をじっと見つめた)

4) Ashurst's hair was smooth, pale, wavy, and had a way of rising on either side of his brow, *as if always being flung* back. (アシャーストの

髪はなめらかで、青白く、波打っていた。そしていつもくしを入れならしく、ひたいの両側に逆っていた)

5) One bird going to bed later than the others was uttering a half-hearted twitter, *as though surprised* at the darkness. (群からおくれてねぐらに飛んで行く一羽の小鳥が、暗闇に驚いたかのように、気のりのしない鳴声を立てていた)

6) He broke off at once, *as though guilty* of disrespect, and touching his hat, prepared to limp on down the lane. (彼はすぐに失礼なことでもしていたかのように話をやめ、帽子に手を触れると、びっこを引き小道を下って行こうとした)

5. 法副詞化した思考動詞

例文にあるような *I suppose, I think, I expect* などは普通文頭に位置すべきであるが、話者の心的態度を示し、文章副詞の代用であり、法副詞 *perhaps, maybe* などにひびいてきする。従って文章副詞と同じような位置、文頭、文尾、文中位をとりうる。

1) "You'll be wanting tea, *I suppose*." (恐らくお茶をお飲みになりたいのでしょう)

2) "In love with you, *I suppose*." (恐らくあなたが好きだからでしょう)

3) "Sh'm one in an'underd, *I think*." (恐らくあんな娘は百人に一人もいやしない)

4) "Well, you ought to sleep, *I expect*." (さて、君は眠らなくちゃいけないんだろう)

5) "Go out like blames, *I expect*." (炎のように消えるんだろうな)

6) "Well, *I daresay* I shan't see him, because I suppose I must be off soon." (でもね、間もなく出発しなければならぬんだから、恐らくお化けには会わないだろうな)

6. 単純形副詞 (Flat adverb)

接尾辞 *-ly* をとる副詞が、接尾辞なしに形容詞と同じ形で用いられたものをいう。これはアメリカ英語の語法の特徴といわれるが、もちろんイギリス英語にもある。The Apple Tree においても同様である。ただアメリカ英語では、はるかに多く、かつ用法も拡大されている。

- 1) She came *close* beside him, offering her shoulder. (彼女は彼のすぐそばにやって来て、肩を貸した)
- 2) And torn between these two emotions he clasped her *close*, and kissed her hair. (そしてこれら二つの感情の間で苦しんで、彼は彼女を力強く抱きしめ、彼女の髪に口づけした)
- 3) He plucked a fragment and held it *close* three blossoms. (彼は小枝を折り、それを胸にぴったり押しあてた—花びらが三つついていた)
- 4) She was standing quite still, biting her lip—very pretty, with her fine, dark hair blown *loose* about her face, and her eyes cast down. (彼女は口びるをかんで全くじっと立っていた—美しい黒い髪の毛が顔にほつれがかって眠をふせ、非常にかわいらしかった)
- 5) And she looked *full* at him. (そして彼女は彼を真直に見た)
- 6) "That'll do *fine*." (それはうまくいくでしょう)
- 7) "Please to drink your tea—it is getting cold. Shall I get you some *fresh*?" (どうぞお茶を飲んで下さい—さめてしまいますわ 入れかえてきませんか)

7. 叙述同格語 (Predicate appositive)

She sat *silent* のように完全文に添加されて、主語または目的語を間接的に修飾し、主動詞と同格的に、ある動作・状態における主語(目的語)の様態を記述する語をいう。

- 1) Dusk had gathered *thick*. (夕やみが濃くたれこめていた)

(104)

2) And away over there was the loom of the moor, and away and away the sky stars which had not as yet full light, pricking *white* through the deep blue heavens. (そしてはるかかなたには、荒野地帯がもうろうと浮び、さらにはるか遠いところには、まだ本当に光り出していない星が、紺青の空に突きぬいて白くなっていた)

3) The moon had just risen, *very golden*, over the hill, and like a bright, powerful, watching spirit peered through the bars of an ash tree's half-naked boughs. (ちょうどいま出たばかりの月はほんとうの黄金色をして丘の向うに輝きわたり、あかあかと力強い見張り番の妖精のように、まばらに葉をつけたとねりこの枝々の間からのぞいていた)

4) Her dark hair waved *untidy* across her broad forehead, her face was short, her upper lip short, showing a glint of teeth, her brows were straight and dark, her lashes long and dark, her nose straight. (彼女の黒い髪の毛は広い額に波打ち、彼女の顔はまるく、きらきらした歯をのぞかせた小さな上唇、濃い眉は一直線に伸び、長く黒いまつげ、まっすぐな鼻すじだった)

5) And suddenly he saw her at her window, *looking out*. (そして突然彼は彼女が窓辺で外を見ている姿を見た)

6) The thought dogged him, *wandering* through fields bright with buttercups, where the little red calves were feeding, and the swallows flying high. (小さな赤い子牛たちが草を喰み、つばめが空高く飛びかい、キンポウゲの咲き乱れる野原をさまよう間にもこの考えは彼につきまとった)

8. 半ば状態を述べる自動詞

動作半分、状態半分を表わす自動詞がある。この種のものは be 動詞での置きかえが可能である。

1) Ashurst *stood* motionless in the empty sitting-room. (アシャーストは人のいない居間でじっと動かずにいた)

- 2) He *stood* still once more in the shadow of the lilacs. (彼はライラックの影でもう一度じっとしていた)
- 3) All that evening this thought *kept* coming back. (その晩はずっとこの考えが繰り返して戻って来た)
- 4) Was she sleeping, or *lying* awake perhaps, disturbed—unhappy at his absence? (眠っているのだろうか、それとも落ち着かないで目を覚ましているのだろうか—彼がいないので淋しくなって)
- 5) But he *lay* inert in the sand, among the indifferent groups of children with their spades and buckets. (しかし彼はシャベルやバケツで遊んでいる無頓着な子供たちの群の中で、ぐったりとして横になっていた)

9. 転移修飾 (transferred epithet)

wicked scissors (いじわるなはさみ), younger days (若い頃), married life (結婚生活), bored voice (退屈した声), これらの修飾関係は名詞に対する直接の修飾ではなくて、その名詞に関係のある人のことを述べるもので、転移修飾という。

- 1) The lame man pushed his hat up; his *aspiring eyes* looked at Ashurst more earnestly than ever. (びっこの男はぐっと帽子を突き上げた。彼のあこがれるような眼が前にもまして真剣にアシャーストを見つめた)
- 2) One vision, specially clear and unreasonable, for he had not even been conscious of noting it, was the face of the youth clearing the gun; its intent, stolid, yet *startled uplook* at the kitchen doorway, quickly shifted to the girl carrying the cider jug. (ただ一つ、特に鮮明で、しかも不可解な幻影は、何の関心も持たなかったにかかわらず、あの銃を掃除していた青年の顔だった。そのしつこい鈍重な、しかも台所の戸口の方を見あげたまなざしは、林檎酒を持って来る少女の方にすばやく向いた)

10. ネクサス関係

名詞と分詞との間にネクサス関係が感じられる。

- 1) Suddenly from overhead he heard little burring boys' voices, little thumps of *boots thrown* down, and another voice, crisp and soft—the girl's putting them to bed, no doubt. (突然頭上から彼はごつごつした発音をする男の子たちの声, 靴が投げ落される小さな音, 歯ぎれのよいおだやかな声—うたがもなく, 女の子をねかせつける声—を聞いた)
- 2) And up there among the tors he was racked between the passionate desire to revel in this new sensation of *spring fulfilled* within him, and a vague but very real uneasiness. (そしてその岩山の中で彼は身うちで春が満たされたというこの新しい感じに耽ろうとする烈しい欲望と, 漠然とはしているが非常に現実的な不安との間に立って苦しんだ)
- 3) Quite a new sensation; terribly delightful, bringing a sense of *completed manhood*. (全く新しい感じ, ひどくたのしい, 一人前の人間として完成された感じを持たらすこと)
- 4) Each queen *wasp killed* meant two thousand fewer wasps to thieve the apples which would grow from that blossom in the orchard. (女王蜂が一匹殺されるごとに果樹園のあの花から実るりんごをぬすむ, 黄蜂二千匹を殺すことになる)
- 5) But she was gone; he could hear a rustle, the grunting of the pigs, the sound of a *gate closing*. (しかし彼女の姿はなかった, 彼はかさかさという葉ずれの音, 豚のぶつぶつという鳴き声, 門が閉まる音を聞いた)

11. 絶対用法 (Absolute Use)

本来他動詞であっても, その目的までは考えず, 動作そのものを考える場合, 目的語は略される。

- 1) If she *knew*! (もし彼女が知っていたら)
- 2) If Stella *knew*, she would give him her blessing for resisting that devil

she believed in; and he uttered a hard laugh. (もしステラが知ったら、彼女が信じこんでいる悪魔に抵抗したとあって、自分を祝福してくれるだろう。そして彼はかたい声で笑った)

3) “Don’t *forget!*” (忘れないで)

4) “I suppose you don’t *remember?*” (もう覚えてないんだろうね)

5) The world was happier *without.* (そんなものがなければこの世はもっと楽しんだ)

12. 代不定詞 (Pro-infinitive)

同一動詞の反復をさけるために第二動詞の代りに用いられる *to* をいう。口語用法である。

1) “Oh! Megan! Why Did you come?”

She looked up, hurt, amazed.

“Sir, you asked me *to.*” (「ああ、メガン、なぜあなたは来たの」彼女は傷つけられ、驚いた様子で見上げた。「あなた様が私にそう求められたからですわ」)

2) “You call her Stella, you see!”

“Why shouldn’t I? It’s a jolly name!”

“All right; we give you leave *to!*” (「あなたは姉さんのことをステラと呼んでいる」「どうして呼んではいけないかね、いい名前だよ」「わかったわ、わたしたちはあなたにそう呼ばしてあげるわ」)

3) “I don’t believe in believing things because one wants *to.*” (「信じたいがために信じる、ということはぼくには信じられないんです」)

4) “But why should one wish to live again, if one isn’t going *to?*” (でも人は、もし信じようとしなないんでしたら、どうしてもっと生きようなんて望むんでしょう」)

13. There+be 以外の自動詞

(108)

be 以外の動詞で多かれ少なかれ存在の意味を持つ自動詞や到着・出現などを意味する自動詞を導き出すにも *there* が用いられる。

1) And still that unknown bird went “Pip-pip,” “Pip-pip,” and *there rose* the busy chattle trout stream, whereon the moon was flinging glances through the bars of her tree-prison. (そしてなおもあの名も知らない小鳥が「ピッーピッ」, 「ピッーピッ」と鳴いた。ますのいる小川のせわしいせせらぎの音が高まってきていた, するとその上に牢格子のように茂った木の枝々を通して月光がちらちら光っていた)

2) Ashurst put his nose to them, and *there stirred* within him vague longings, chilled instantly by a vision of Megan’s anxious face lifted to the faces of the passers-by. (アシャーストはそれに鼻を近づけた, すると彼の身うちにほのかな憧れが湧き出したが, たちまち通行人の顔を振りあおいでいるメガンの切なそうな顔の幻で冷めてしまった)

3) And *there moved* in him a longing to go down and see again the farm and the orchard, and the meadow of the gipsy bogle. (そして彼の心のうちに, 下りて行って農場と果樹園とジプシーのお化けの出る牧場を, も一度見たいという気持が動いた)

14. *There be* + 定的主語

There be 構文に続く主語は普通不定的なものであるが, 定的なものがある場合がある。しかしかような場合はほとんどなんらかの制限が加わることが多い。すなわち, 前に現われた名詞をくり返す場合, *of*~などによって意味が特定になる場合などである。

1) “*There’ll be the tea* ready when you come back.” (おもどりになったらお茶の準備ができています)

2) “Is there a stream where we could bathe?”

“*There’s the strame* at the bottom of the orchard, but sittin’ down you’ll

not be covered!” (「われわれが水浴できる小川がありますか」「果樹園の下の方にその小川がありますが、すわっても水がかぶらないでしょう」)

3) The cuckoos were still calling when he woke, *there was the sound of running water*. (彼が目をさました時まだかっこう鳥が鳴いていた。流れる水の音がしていた)

4) At the back of orthodox religion, so far as I can see, *there's always the idea of reward*—what you can get for being good. (ぼくが理解している限りでは、正統派宗教には必ず報酬という考え—善人であれば何が得られるか、といった考えがあります)

15. 近接未来 (Immediate future)

進行形の形をとって近接未来を表わす。現在ではあらゆる動詞において可能であるが、特に往来発着を示す動詞、すなわち come, go, start, leave, arrive, depart, return などの場合がもっとも普通に使用される。

1) “*Are you going to awaken her?*” (「君は彼女を目覚めさせようと思っているのか」)

2) “*What am I going to do?*” he thought. (「ぼくは何をしようというんだ」と彼は考えた)

3) “I say, do buck up; *we're going to start at half-part nine*.” (「ねえ、本当に元気をお出なさいよ、九時半に出発するのよ」)

4) “*Are you lunching anywhere?*” (「どこかで昼飯を食うのかい」)

16. イタリックによる強意

意味を強めるためにイタリック体にする場合が The Apple Tree の中では多い。

1) “Ah! *I thought you were a Celt*; so it's not your farm?” (「ああ、ぼくはあなたがケルト人かと思いました。じゃあ、そこはあなたたちの農場じゃないんだね」)

(110)

- 2) “But why should one *wish* to live again, if one isn’t going to?” (「でも人は、もし信じようとしないうでしたら、どうしてもっと生きようなんて望むんでしょう」)
- 3) And Ashurst thought: ‘You *are* a pretty thing!’ (そしてアシャーストは思った、「あなたはかわいい人だ」)
- 4) “I shouldn’t like to say rightly that ‘t *was* there.” (「それがほんとうにそこにいたことは正確に言いたくない」)
- 5) “I say, you know, you *are* a brick!” (「ねえ、あなたは本当に親切ない方ね」)
- 6) “You *are* a beast!” (「あなたはなんてひどい人」)
- 7) “And I *will* take care of you, I promise, Megan.” (「そして私はあなたのためをみてあげる。約束するよ、メガン」)
- 8) “I’m going to say a prayer for *you* to’night!” (「今夜、あなたのためにお祈りをしよう」)
- 9) “It’s fond of you already. Ah! Megan, everything is fond of *you*.” (「それはすでにあなたを好いている。ああ、メガン、すべてのものがあなたを好いている」)
- 10) “You call *her* Stella, you see!” (「あなたは姉さんをステラと呼んでいいわ」)

17. 助動詞 **do** による強意

- 1) To his amazement the girl *did* kiss her hand and stretch it out. (彼の驚いたことにはその娘は本当に手に接吻してそれを差出した)
- 2) “Garton’s crazy about that sort of thing; but I must say Joe *does* look a bit Early Saxon.” (「ガートンはそういうことについて夢中だ、しかしジョーは本当に少々古代サクソン人のようにみえると私は言わねばならない」)
- 3) “And you really *do* think it was there!” (「そしてそれがそこにいた

と実際本当に考えているなんて」)

4) “Then you *do* believe in being good?” (「それじゃあなたは善良であることはよいことだと本当にお思いなんですね」)

5) “I say, *do* buck up; we’re going to start at half-pastnine.” (「ねえ、本当に元気をお出しなさいよ、九時半に出発するのよ」)

18. 直喩 (Simile) による強意

as…の形式の強意的直喩を用いて意味を強める。

1) On one side of the recessed fire-place sat two small boys, idle, and *good as gold*. (奥まった暖炉の一方の側に二人の少年が、なにもしないで、おとなしくすわっていた)

2) Both were over six feet, and *as thin as rails*. (二人とも六フィート以上もあった、そしてやせていた)

3) It had been exactly like looking at a flower, or some other pretty sight in Nature—till, with a funny little shiver, she had lowered her glance and gone out, *quiet as a mouse*. (それはまるで、花だとか、自然の中の何か美しい風景に見とれているみたいだった一気がつくと、彼女はちょっと変に身を震わして眼を伏せ、二十日ねずみのように静かに出て行った)

19. 従位接続詞の等位接続詞化

本来は従位接続詞であるが、その機能が等位接続詞になったものがある。

till と while がそれで、till は and at last の意になる。

1) He stayed up there for hours, *till* it grew cold, then groped his way down the stones and heather roots to the road, back into the lane, and came again past the wild meadow to the orchard. (彼はそこに何時間もいた。そしてとうとう寒くなり、それから石やヒースの根の間を手探りで道路に出、小道にもどり、荒涼とした牧場を通過して果樹園に帰った)

2) He caught hold of her hands, but she shrank back, *till* her passion-

(112)

ate little face and loose dark hair were caught among the pink clusters of the apple blossom. (彼は彼女の両手を握りしめた、しかし彼女は後ずさりして行って、とうとうその興奮した小さな顔とほつれた黒い髪が桃色のこもりした林檎の花の中に埋まってしまった)

3) Then the girl seized his hand, put it to her cheek, her heart, her lips, kissed it passionately, and fled away among the mossy trunks of the apple trees, *till* they hid her from him. (するとその娘は彼の手を取って、それを自分のほおと心臓と唇に押しあて、烈しく接吻して、こけむした林檎の木の幹の間へ逃げこんでいき、そしてついに隠れてしまった)

4) Then followed silence, dead as ever, *till* the song of a blackbird, not properly awoke, adventured into the hush. (それから全く死のような静寂がつづいた、そしてついに完全に覚め切っていないツグミの歌が沈黙を破った)

5) But in the evenings he installed himself in the window seat in the kitchen, smoking and chatting with the lame man Jim, or Mrs. Narracombe, *while* the girl sewed, or moved about, clearing the supper things away. (しかし夜には彼は台所の窓辺の椅子にすわりこんで、タバコをふかしたりびっこのジムやナラコウム夫人とおしゃべりしたりした。その間メガンは縫い物をしたり、夕食のあとかたづけをして動きまわっていた)

6) He went out to the green chair as devoid of a book as ever; and there he sat staring vacantly before him, triumphant and remorseful, *while* under his nose and behind his back the work of the farm went on. (彼は出て行ってやはり本を持たないままで縁の椅子のところへ行った。そしてそこに勝利感と後悔の念がまじった気持で、ぼんやりと前の方を見つめた。その間にも彼の周囲では農場の仕事が続けられていた)

20. 古風な (Archaic) 英語

a) 副詞的目的格の使用

1) He lay there *a long time*, watching the sunlight wheel till the crab-trees threw shadows over the bluebells, his only companions a few wild bees. (彼はそこに長い間横になって、日光がまわって野林檎の木がブルーベルに影を落すのをじっとながめていた。伴れといっってはただ数匹の野の蜂になってしまった)

2) Except for a definite irritation with his friend, natural when you have tramped with a man for three days, Ashurst's memories and visions that *sleepless night* were kindly and wistful and exciting. (友人と三日も旅行すれば起るのが当然な、どうしようもないいらだたしい感情を除けば、この眠れぬ夜のアシャーストの追憶と幻想とは、穏かで希望に満ちた面白いものだった)

3) Ashurst, *full length* on the horsehair sofa, and jutting far beyond its end, smoked a deeply-coloured pipe, and did not listen, thinking of the girl's face when she brought in a relay of cakes. (アシャーストは馬毛入りのソファに、足先にゆっと突きだして長々と寝そべり、濃い色のパイプで煙草をくゆらせ、ガートンの話なんか聞きもせず、ケーキのおかわりを持って来た少女の顔のことばかり考えていた)

b) 副詞的属格の代用

4) "They zay there's no such thing as bogles, but I've a-zeen the 'air on this dog standin' up *of a dark naight*, when I couldn' zee nothin', meself." (「お化けなんていねエってこったが、わしァある晩わしには何も見えねえのにこの犬の毛が、おっ立つのを見たことがありますだ」)

c) Please to 不定詞

5) "*Please to drink* your tea—it is getting cold." (どうぞお茶をおのみ下さい—さめてしまいます)

(114)

d) know not

6) How long they stood there without speaking he *knew not*. (どのくらい長い間ひとことも言わずにそこにいたか彼にはわからなかった)

7) And watching the white clouds so bright against the intense blue, Ashurst, on his silver-wedding day, loned for he *knew not what*. (青空に映えるまばゆいばかりの白い雲を見つめながら、アシャーストはこの銀婚式ともあろう日に、ふとなにか切ない憧れにかられた—が、それがなにであるかわからなかった)

e) an hotel

an は現代英語初期には[h]音の前に用いられた。ただし an historian のようにアクセントのない音節の前では長い間用いられた。

8) Hooked in by that friendly arm Ashurst went along, up a hill, down a hill, away out of the town, while the voice of Halliday, redolent of optimism as his face was of sun, explained how “in this mould place the only decent things were the bathing and boating,” and so on, till presently they came to a crescent of houses a little above and back from the sea, and into the centre one—*an hotel*—made their way. (そのなつかしい腕にかかえこまれて、アシャーストは、丘をあがり、丘を下って、町から離れて行った。その間もハリディは、陽気な顔のように、いかにも楽天的な声でこんな古くさい土地で、なんとかがまんでできるものは、水泳とボートだけだ、と説明したが、とうとう、間もなく彼等は、海から引っ込んだ小高い三日月形になっているところに出て、その中央の建物—ホテルだが—に入ってしまった)